



禪師曾我

天竺井
未
花の名強よづくか
つる所は 是を曾我兄才り

はちろ鬼王強三帝少くも

その足才の人を九日乃其日の
なるをこらんとくいての屋形小

志のひ入敵とくちがも才も師有

ふらわらひくけちりし我も
は供とぬかかいた子に形見を侍
唯今あらふに歸りけり
あきてうしきくたを捨る
りり孫うねに越ゆる山は
名なきうのの煙見せし
あはぬや小ゆり子うき氣を
く

いたし内(書)りしに鬼王降る
あくる人までもあはれし
一葉うきお只今を何の爲にきり
く^元式にけをかり日乃水市
兄才乃人日來れり
井ての屋敷小丑に敵をもづら
て身と己の府より流れて又

ふせりーこの事まだ
いふをたへありともいふが
とうの蓋乃 義のさても様
子と衣あに何事と云ふ
かりのけいしてくその寺ふを
ふりく 是を供神の禪師
てと我別行乃子御る百座のて

ゆとそらうとやとぬ休いたる

有^く護摩堂戸とわけ

夜^に浪^のかつもらねの梢をわたりや

よせくちしん 是を伊夜乃

九郎助宗あり初とてさい白の

長曾我兄才乃者日以乃本を

こけんとそ井玉の屋形にまへ

敵とてうちあはれし所なふとれ
てとておとくにうこの様所と
ア、作と知サ乃ときよりもう
わ、ねのふはりてとといひ成者
ア、やん君同百たふとるひ
急うめてあきとふ事少てと
不使ふた低者をいけとりやこ

為、今倍祢のまへと
をいふに、此の案のり、伊藤
九郎祐宗、まゝてい急ひと
ま戸と出ひきき、祐宗と何
力たり、出ふとくひと、
らうの、あふとくひ、
ます、官の長、曾我兄弟の者、日

ぢふとけんとく井の石形
小石入敵とてうらぐて身も師
度ふふれてとあつてや依
さくそ助宗は其討まぬ家先に
たふとちやとめいた助宗は
ヤレうらり又れまうてと岡多
よ海に程が箭はとめてたうと

此者ともやがらとていふ
ハふちも師度ふとてまうて又
おとふと為つて家ごのいふも
なんのまうにも命はまう
してあつて跡もまう
あつとめも身もまう
さくうらり程に今までの時を

たぬるうおちうー有難いよ
いた助家を果るほろーいぬ
しくはまもや情なうもたへ
りいりるゆあすーくさん
しやにうりまーが名をわけ
てまをん 標是をり津の言
糸の子は休の禪師とていふあ

下ふ^{大ニル}酒魔降伏のりん三人の
毛刀りーるーりーるーや
うーもあーりる^{きき}心得る助家
はく^き親父も親といふ名あり
刀もあやーや立等の料も
う海しや^きや^きや^きも
是世ふあーるー何のよう

し城なくも身とたし
よきもくも本戸と
まてわをいふちうま
あやまらふわやく
に田の小三師
毛刃取の法師乃きとけ
けあり南を佛とさ
い

かきとを少一の祈とく
いふもいふそよき
れ勝負とくとつ源六
あはれ者我も我も
とも得師をち
宴やうこまり
前乃ちりちるい

美

禪波曾我十五之

八

今、是は成（即）ちくちのりく
 ちうくとあはれうきふけしを
 わりが幸さにもはてあひん
 んあひんけんにはるわねら
 もとのよりむらむけとり
 元とそ利んとすい鑑金とを
 つまみかく

傳重

天次

梅の衣を薄紙にぐく露けし袖や
 是を甲替れし帛義
 盛やくは襖河のは帛重に下
 夫車とて衣を若かりし人の衣を
 是を甲替れし帛義
 人の衣を甲替れし帛義

夜ハ此宿に匿^カれ^ル物^ヲを

ヤ^ニさ^ニり^テひ^キく^トも^シき^テ

ト^ニさ^ニり^テう^キ宿^ヲを^テ取^ル

心得^ヲい^ハふ^ニ今夜^ハ我^ノ人^ヲ

懺^ヲ物^ヲは^ル人^ヲう^キき^テ物^ヲ

と^ニト^ニ我^ノ君^ノ成^リに^テ

事^ヲ懺^ヲ物^ヲは^ル人^ヲま^ニ是^ニ

光^ヲく^ニト^ニ急^ニに^テ人^ヲ

い^ハく^ニも^ニう^キも^ニた^ニま^ニ

て^ニ候^ニふ^ニき^ニう^キあ^ニい^ニう^キち^ニ

か^ニう^キく^ニい^ハく^ニあ^ニう^キあ^ニい^ニ

ア^ニう^キト^ニい^ハく^ニあ^ニう^キあ^ニい^ニ

ト^ニア^ニあ^ニう^キあ^ニい^ニあ^ニう^キあ^ニ

ハ^ニ西^ニ海^ニ四^ニ海^ニの^ニい^ニふ^ニ一^ニ度^ニ

かくの名をとりてはたてざる平家
とほろち一統の代とあり
行へるぞうとて我朝も
ほひかくとてふとてかく
を我君とまつとて思ふ義は
物とまのうとてそとて
かしきとてなとて
とてふとての代とて
く百年のうとて
ちとてにほとて
もはたはたのうとて
おのの彼とて
てとてとて
しとてとて我君と

後醍醐天皇

もつて事とていふて

ふつていふて

あり西海四海のあつて

ほつていふて

ふつていふて

運きもやふきたるふ

ふつていふて

ふつていふて

ふつていふて

ふつていふて

ふつていふて

ふつていふて

ふつていふて

ふつていふて

ふつていふて

いしき

はりきいをみせしむるまに
 小ほきてもり来のひまき様の
 道行こそわうかうたれく
 至長く明くもいづき街ちあ
 所ふもろもくい 宵のあつ後
 小夜う明おるもまゝのいづき
 たとふくふく 月白の
 京鎌倉のるき見かくいあ
 成をも方うたぐちうあさ
 乃くく 是あつ我う都の
 ほふもろ道ふくい末さく
 たりあち御同ふかりま
 びやての かく不思候や飯重
 き日本一の太鼓のうか

清輔十卷

おきあきくふく^レトウ^レ行^レとや^レ此
 なきけし^レひ^レ名^レ残^レに^レき^レ見^レ
 流^レひ^レく^レま^レう^レゆ^レり^レ行^レ来^レと^レい^レひ
 て^レい^レい^レま^レや^レと^レそ^レし^レト^レい^レに^レ清
 重^レ小^レ中^レ休^レや^レい^レま^レい^レ此^レ所^レ小^レ所^レ居
 へ^レり^レか^レん^レ休^レあ^レま^レの^レ新^レと^レ見^レ中^レ
 小^レ中^レの^レ名^レ残^レに^レけ^レい^レかん^レに^レい^レ
 へ^レト^レ所^レ陰^レひ^レ刀^レを^レう^レま^レう^レ意^レを^レ
 へ^レた^レし^レあ^レま^レを^レき^レい^レん^レが^レう^レへ^レ所^レ
 へ^レへ^レと^レ腰^レ物^レを^レい^レま^レう^レぬ^レへ^レ
 と^レや^レ中^レく^レの^レ事^レ所^レに^レき^レう^レ者^レ
 新^レぬ^レト^レた^レ所^レ重^レは^レ乃^レ所^レ腰^レの^レ物^レと
 中^レお^レ又^レあ^レい^レの^レ中^レに^レう^レい^レく^レま^レう^レ
 ま^レい^レく^レ休^レ物^レを^レい^レま^レう^レく^レへ^レ

へこそ身代りけり事せしむ
此刀をあらいたくまでもそわ
をりけりおきあらうと思ふ
へ^{ニテ}付と此刀を下るき直ぐ
いつくまでも中の方にうひやあらうと
あをよと伝や中^{ニテ}の^{ニテ}下る
はらうとあらうと又是あらう刀を

清重の家小はきりきりきりきり
 所きりきりきりきりきりきり
 まきりきりきりきりきりきり
 見小所きりきりきりきり
 よきりきりきりきりきりきり
 可きりきりきりきりきりきり
 見きりきりきりきりきりきり

野中と前ふまの落しに筆をたて
さうしきもちりねうもく行す
言決る断机座小見所
きくはつた日平一の大ねく
はつた座のうへうわさいた
もくうたーくしとて物乃
をさふもや弛ぬく仁愛と
はけくうらぬもた死にう
ふしきなり運こそあふまき
てふよあふ君の如文ははは
くははははははははははは
きあふしといふもあふまき
アははははははははははは
けははははははははははは

いふら^りか^りく^り 貞^と憲^の笑^を笑^ふ

煙^と成^るま^ふら^うも^た

ア^らる^から^う石^火電^をさ^るく

世^の夢^をあ^うと^にね^るに^て

つ^らい^なく^てよ^うに^に敵^をは^る

后^にり^くさ^るは^は後^に人^に

富^のの^のあ^うと^もさ^るに^て

及^てい^ふに^てい^ふに^てい^ふに^て

いた^るも^ある客^僧を^いの^くさ^う

い^ふに^てい^ふに^てい^ふに^てい^ふに^て

き^のの^のあ^うと^もさ^るに^て

れ^んは^あく^と 然^に野^の素^の省^の雅^の

ア^らる^から^う客^僧を^見る^に

者^のい^ふに^てい^ふに^てい^ふに^て

あつと見ゆくもほふるをうこ

あつと見ゆくもほふるをうこ

あつと見ゆくもほふるをうこ

あつと見ゆくもほふるをうこ

あつと見ゆくもほふるをうこ

あつと見ゆくもほふるをうこ

あつと見ゆくもほふるをうこ

あつと見ゆくもほふるをうこ

あつと見ゆくもほふるをうこ

あつと見ゆくもほふるをうこ

あつと見ゆくもほふるをうこ

あつと見ゆくもほふるをうこ

あつと見ゆくもほふるをうこ

あつと見ゆくもほふるをうこ

ニテト

いさみきふおほきく馬
ハ騎切落し平おさる勢
とぎく一人切きて大勢
たらのきぬい生害これま
西ふひくきもあきう
命し腹切おれ海軍は
いそりく

夜討雷

祐成
時宗
引

其ふも高に富士の根
ふやふとく是ハ雷
てはねも北度鎌倉殿
ふり山同東ハ箇國
ひり建唯今富士を野
と急

夜討曾我部三

今^{ナニ}自^{ナニ}少^{ナニ}く^{ナニ}い^{ナニ}の^{ナニ}冷^{ナニ}入^{ナニ}き^{ナニ}古^{ナニ}郷^{ナニ}を^{ナニ}移^{ナニ}し^{ナニ}て^{ナニ}
 移^{ナニ}す^{ナニ}い^{ナニ}う^{ナニ}敷^{ナニ}余^{ナニ}波^{ナニ}を^{ナニ}ち^{ナニ}し^{ナニ}秘^{ナニ}室^{ナニ}入^{ナニ}り^{ナニ}
 く^{ナニ}垣^{ナニ}根^{ナニ}の^{ナニ}窓^{ナニ}外^{ナニ}に^{ナニ}虫^{ナニ}鳴^{ナニ}散^{ナニ}り^{ナニ}夜^{ナニ}
 ぞ^{ナニ}と^{ナニ}秘^{ナニ}室^{ナニ}柄^{ナニ}を^{ナニ}遠^{ナニ}く^{ナニ}し^{ナニ}一^{ナニ}室^{ナニ}の^{ナニ}も^{ナニ}ぞ^{ナニ}
 我^{ナニ}も^{ナニ}急^{ナニ}き^{ナニ}も^{ナニ}く^{ナニ}急^{ナニ}く^{ナニ}移^{ナニ}し^{ナニ}富^{ナニ}士^{ナニ}の^{ナニ}
 正^{ナニ}を^{ナニ}野^{ナニ}に^{ナニ}多^{ナニ}く^{ナニ}鳴^{ナニ}し^{ナニ}五^{ナニ}良^{ナニ}武^{ナニ}前^{ナニ}
 正^{ナニ}に^{ナニ}然^{ナニ}る^{ナニ}も^{ナニ}前^{ナニ}は^{ナニ}幕^{ナニ}と^{ナニ}う^{ナニ}せ^{ナニ}と^{ナニ}

我^{ナニ}て^{ナニ}い^{ナニ}れ^{ナニ}る^{ナニ}も^{ナニ}然^{ナニ}る^{ナニ}も^{ナニ}前^{ナニ}は^{ナニ}い^{ナニ}が^{ナニ}と^{ナニ}浮^{ナニ}
 三^{ナニ}郎^{ナニ}前^{ナニ}は^{ナニ}幕^{ナニ}と^{ナニ}う^{ナニ}い^{ナニ}（^{ナニ}我^{ナニ}て^{ナニ}い^{ナニ}）^{ナニ}東^{ナニ}
 一^{ナニ}個^{ナニ}の^{ナニ}大^{ナニ}公^{ナニ}と^{ナニ}い^{ナニ}う^{ナニ}い^{ナニ}や^{ナニ}と^{ナニ}幕^{ナニ}う^{ナニ}
 なる^{ナニ}其^{ナニ}中^{ナニ}に^{ナニ}秘^{ナニ}く^{ナニ}兄^{ナニ}才^{ナニ}う^{ナニ}幕^{ナニ}入^{ナニ}内^{ナニ}り^{ナニ}と^{ナニ}
 さ^{ナニ}ひ^{ナニ}き^{ナニ}い^{ナニ}あ^{ナニ}く^{ナニ}い^{ナニ}い^{ナニ}意^{ナニ}の^{ナニ}い^{ナニ}と^{ナニ}き^{ナニ}
 移^{ナニ}し^{ナニ}る^{ナニ}も^{ナニ}其^{ナニ}中^{ナニ}に^{ナニ}秘^{ナニ}く^{ナニ}あ^{ナニ}る^{ナニ}事^{ナニ}と^{ナニ}い^{ナニ}ふ^{ナニ}
 面^{ナニ}目^{ナニ}あ^{ナニ}る^{ナニ}も^{ナニ}人^{ナニ}知^{ナニ}れ^{ナニ}る^{ナニ}増^{ナニ}え^{ナニ}事^{ナニ}と^{ナニ}い^{ナニ}ふ^{ナニ}

夜討曾我部三

その方増のりふふ ^{シテ} ぶてハ思ふ

ふれていふや彼祐常の事き ^{法成}

又祐常の事行時を ^{シテ}

あふ ^{シテ} 移るは ^{法成} 今使ふ ^{法成}

彼祐常の事討 ^{法成} あり ^{法成}

是 ^{法成} ち ^{法成} ぐ ^{法成} ざ ^{法成} り ^{法成} 及 ^{法成} 今使ふ ^{法成}

は ^{法成} ち ^{法成} 又 ^{法成} 母 ^{法成} 王 ^{法成} 者 ^{法成} 王 ^{法成} 王 ^{法成}

ア ^{法成} ち ^{法成} 祐 ^{法成} 常 ^{法成} 郷 ^{法成} 人 ^{法成} の ^{法成} 地 ^{法成} 王 ^{法成} 王 ^{法成}

鬼 ^{法成} 王 ^{法成} 彈 ^{法成} 三 ^{法成} 良 ^{法成} 王 ^{法成} 王 ^{法成} 王 ^{法成}

王 ^{法成} 王 ^{法成} 王 ^{法成} 王 ^{法成} 王 ^{法成} 王 ^{法成} 王 ^{法成} 王 ^{法成}

王 ^{法成} 王 ^{法成} 王 ^{法成} 王 ^{法成} 王 ^{法成} 王 ^{法成} 王 ^{法成} 王 ^{法成}

王 ^{法成} 王 ^{法成} 王 ^{法成} 王 ^{法成} 王 ^{法成} 王 ^{法成} 王 ^{法成} 王 ^{法成}

王 ^{法成} 王 ^{法成} 王 ^{法成} 王 ^{法成} 王 ^{法成} 王 ^{法成} 王 ^{法成} 王 ^{法成}

王 ^{法成} 王 ^{法成} 王 ^{法成} 王 ^{法成} 王 ^{法成} 王 ^{法成} 王 ^{法成} 王 ^{法成}

彈三郎某の事と承けはくさ
 真直の事^浮 是^浮の事あるに
 事と信じておれぬ行事なくも
 諺の言ふ同敷^{祐成} 此優敷
 て有るや皮討より已に彼祐常を討
 たりあり及ば兄才を殺さんとおぼへ
 たり^浮 是^浮の事意なくは様

年月ちのころそごの折に真光
 多く討死はくさ為さくさく人今
 といふある事方同敷^{祐成} され
 といふ詞をりあるにだるさる為
 ありそある行て後多と致
 といふあり人^浮 言語通断神
 不傳あるさるなり相門とくす

今世にあらぬ御座りな意なり
 ありぬゆゑにまゐりて月くづるを
 かくし命を捨てる肝要ありては
 我あつて彈三郎殿とさう申
 さすうさくい ^浮 文むじりく
 なる ^{ニテ} 暫え心とちりあてたり
 國神の兄方の者母はわくもさ

ちとあるなるふさうのつり
 ありきあり ^{ちか上} 教者上座と君に
 のれをうたふは是とさういふ
 永く世の助當 ^{同右} 拙詢は宜へ
 く ^寄 鬼王彈三良さういふ
 母と云 ^下 声をうたふはぬく
 あ ^上 人のつらさを贈るは

沢より山へ焚燬する母の夜とて
 へる。水もせいの例あれ。今
 當代のうらまへ母衣とて是をふ付
 たる。御まに秘する。見。牙をたふ
 なる。ふあ。秘。恩。の。あ。つ
 長る。書。浪。ぬ。ふ。わ。あ。其時
 祐成。文。海。く。を。書。さ。み。是。祐成

今のうらまへ書文。文。字。消。て。う。も
 とも。秘。刀。ま。は。流。入。皆。人。の。秘。見。ま。手
 跡。ま。は。物。あ。水。盛。密。跡。と。は。な
 り。く。こ。ひ。く。方。め。不。定。と。す。る。に。あ
 若。き。令。り。も。申。ま。れ。も。方。く。も。秘。跡。母。の
 あ。ひ。秘。た。密。跡。の。現。う。と。思。ひ。か
 ら。よ。其。う。に。時。宗。を。肌。の。ち。ま。う。

此是時家之難。後人云。人
亡迹の思ひ方なり。と雖も
責てなくさむ。惜ひあり。時家も母上
の情尸たるこ思ひ。めせ。今も其重を
ち。仏の觀世音。此の縁あり。と云
世も。及たも。ひ。ゆ。へ。る。金。上。觀。世。音。日。没
の鐘。も。や。声。も。言。門。無。常。と。も。

度ふ。さ。り。及。よ。き。け。急。を。使。は。し。又
ま。あ。り。ふ。く。具。候。金。も。文。也。燦。ぬ。同。
を。詠。し。人。の。心。通。へ。さ。り。思。白。也。
雲。の。り。れ。や。面。土。の。と。を。し。ま。る。雪。す。
ま。海。も。ハ。兄。才。も。こ。く。を。跡。と。入。道。王。
て。泣。く。こ。も。る。長。き。よ。く。早。被。方。に。あ。る。
く。打。白。良。の。音。も。く。同。も。つ。る。

後醍醐天皇

て強ういふ^{早苗}が^七教し軍共わ

ずり兄を討して多くの饒兵

ふあひて家とをいふかたきや

る^二平助殿く^一あ^二ま^一や

はる事あらそ宵は新田即と

あひ^二ね^一い^二や^一討ま給ひてい

死あり^二一^一前^二を^一あ^二ま^一や

つ^二た^一あ^二ま^一や^二あ^一ま^二あ^一

て^二あ^一ま^二あ^一ま^二あ^一ま^二あ^一

は^二あ^一ま^二あ^一ま^二あ^一ま^二あ^一

つ^二た^一あ^二ま^一あ^二ま^一あ^二ま^一

あ^二ま^一あ^二ま^一あ^二ま^一あ^二ま^一

あ^二ま^一あ^二ま^一あ^二ま^一あ^二ま^一

直^二た^一あ^二ま^一あ^二ま^一あ^二ま^一

後醍醐天皇

夜計曾我

あゝいふにきくは、
のうや五郎サトウハチロー、
秘術ヒジュツをうけ、
切てり。時宗トキムネも、
なうきかき、
戦ひし、
三つは、

太夫言レテス
ルヨ笛イ只アレライ

王も所なく
 入るて叶ひ
 手を搦るも
 唐戸の眼を
 懸たふ今時
 加え落て定
 通るを成り

夜時曾我十卷

九終

あふちき行者
五郎九郎おの綿割つて
あふちき行者として時宗より
あふちき行者として時宗より
あふちき行者として時宗より
あふちき行者として時宗より
あふちき行者として時宗より
あふちき行者として時宗より
あふちき行者として時宗より
あふちき行者として時宗より
あふちき行者として時宗より

大佛供養

木

あふちき行者として時宗より
あふちき行者として時宗より
あふちき行者として時宗より
あふちき行者として時宗より
あふちき行者として時宗より
あふちき行者として時宗より
あふちき行者として時宗より
あふちき行者として時宗より
あふちき行者として時宗より
あふちき行者として時宗より

夜時曾我十卷

九終

大仏供養十一

ついでに母の方案内と

いふやうな母の聲と

北行の母の聲と

南無阿彌陀佛の諸佛の聲と

母の景清の聲と

母の母の聲と

内案内の母の聲と

母の聲と

母の聲と

母の聲と

母の聲と

母の聲と

母の聲と

母の聲と

みくろ清水の音龍戸てくハ大佛
供養の頼朝の沙より乃由家へ向
貴賤はなれ是迄よりて依^母之
娘の事も事なれおぢ又ハ方^母の竊事
をい事有づともく母は信くさい
何事やぐ^母事^母に付く^母事^母と
とらあて^母誠^母を^母方^母の^母方^母と

あつ頼朝を頼^母ひ鈴^母中^母人^母ハ誠
あ^母い^母是^母ハ大^母事^母の^母と^母と^母事^母
あ^母れ^母計^母と^母行^母と^母つ^母と^母人^母ハ誠^母
及^母あ^母い^母事^母ハ申^母ハ^母と^母と^母事^母
れ^母の^母あ^母い^母事^母ハ^母と^母と^母事^母
あ^母い^母も^母今^母い^母事^母の^母と^母と^母事^母
は^母付^母と^母い^母事^母ハ^母と^母と^母事^母

大仙供養の十一

てゝ病は服尸供養をあらうと
母
扱ふ事にあつたといふにそれ
慎みと堂で書つたといふは
上
誤り

頼朝

太公供養十巻

頼朝は源家の官軍右大将頼朝に
 秘事をあづかりしに、
 のち建立大仏殿をたし、
 又此君の威を今に傳ふに
 大仏殿に供養をせしむる
 事の日三益の山にたし、
 声もさるゝに供養をせしむる

頼朝は
 供養に頼朝をたし、
 又此君の威を今に傳ふに
 大仏殿に供養をせしむる
 事の日三益の山にたし、
 声もさるゝに供養をせしむる

^早某ね流るる子家の侍悪七景景清
 こそと方とありし我君と祈ひ
 うゝ家と國のつゝ景清とみ
^早是はむの清和量とて以て誓固の面
 は信付れ討つるやと祈ひて
^早是は誓固の面と家と唯今とて志
 白殿とてや討つるやと祈ひて

こそ高き下多し
 多し用意の誓固の兵皆一同
 立ちし其時と人影とて思
 ぬるは情や朝と祈ひて
 祈ひき終るる安全あり爰とて
 して祈ひのつゝありぬる
 是はむの清和量とて以て誓固の面

るゝや大音あけくゝる素まじり様
是は家家の侍悪七共清景音こゝろ
素まじりくゝる九とくゝるくゝる
振振立向ひ大珠はわくゝるへいさ
るゝる言固あまの字かへるゝる
はるゝる中は君武者もくゝるくゝる
るゝるくゝるくゝるくゝるくゝる

て手もくゝるくゝるくゝるくゝる勝負を
はるゝる今景清是はくゝるくゝる
はるゝる新念をくゝるくゝるくゝる
はるゝる霧立くゝるくゝるくゝる
はるゝる入落もくゝるくゝるくゝる
はるゝるくゝるくゝるくゝるくゝる
はるゝるくゝるくゝるくゝるくゝる

橋辨慶

月
 西塔のりつゝに留居する武蔵坊
 年慶より別荘新子細るより
 北野へ丑の時訪てはふ今夜は東
 山十禅よりまゝとわははに
 有^{ちり}河前より今夜東山十禅
 寺へまゝとわははに今夜

ありては、
 行てさるるまで
 明夜まで、又桑名橋を通りて六
 年の福十二三とあるたふぶ者
 の小力と物と切てはるるさる
 う蝶鳥とくまひつる
 やうのまゐりうさるる
 あり

[illegible]

梅沢のうた

わく　　夜半持ある事　　今夜
　　さるの時は　　と思ひ　　度
　　へ　　と　　年　　慶　　福　　の　　者　　り　　安　　眠　　して
　　さ　　時　　ま　　は　　る　　夜　　ま　　け　　の　　橋　　ま　　出　　生
　　の　　そ　　ろ　　を　　た　　つ　　も　　し　　と　　夕　　陽　　あ　　る　　音
　　い　　ち　　ち　　く　　雲　　の　　も　　は　　も　　い　　く　　く
　　凡　　そ　　ろ　　ろ　　を　　ま　　る　　夜　　ま　　と　　ま　　と　　と　　社

牛希　　十　　月　　史

い　　居　　ま　　き　　く
　　い　　の　　も　　も　　ま　　は　　の　　あ　　り　　ま　　る　　ま　　あ　　る　　人
　　今　　宵　　ま　　る　　の　　名　　あ　　る　　ま　　る　　の　　夜　　ま　　る　　人
　　だ　　ら　　ま　　る　　の　　月　　ま　　る　　と　　あ　　る　　と　　あ　　る　　人
　　雲　　の　　行　　き　　ま　　る　　の　　夜　　ま　　る　　の　　人
　　さ　　ら　　ま　　る　　の　　雲　　ま　　る　　の　　人
　　く　　ま　　る　　の　　人　　ま　　る　　の　　人

卷之五

白波の^{ハナ}花は^{ハナ}花に^{ハナ}父又^{ハナ}糸を^{ハナ}
 橋板とく^{ハナ}くや踏あ^{ハナ}んふ
 何れも^{ハナ}夜は通る人^{ハナ}も
 居たり^{ハナ}既夜^{ハナ}とき時^{ハナ}きて
 三塔の鐘も^{ハナ}月がえりや
 月影は^{ハナ}鎧の黒革^{ハナ}威の威防
 お大鎧草摺長き^{ハナ}おの^{ハナ}手より

母を大長刀真中にて打つけ
 るく望みし我は横ひりある天魔鬼
 神ありて面をばくるるやうありと
 世に才ありてむねをばくるるやうあり
 たり歎のふいふさよ
 是より内三毛
 まる橋乃面より通る人
 て心もさへは破断へん
 并書りハ

ともちうのまゝに橋のしきり
 あつたうきうきうきうきう
 もきうきうきうきう
 いともやあやうきうきう
 もきうきうきうきう
 乗るうきうきうきう
 いともやあやうきうきう
 もきうきうきうきう

事ありて思ひつゝひつゝ
 長刀の柄をうづと踏あられ
 其白癩よりかゝるしと
 あゝいふに手あみ
 神を切てわかれ中君の女をさへ
 刀立ちあがりて流るるのしる

[illegible]

女ハ西塔ハ武蔵弁慶ありと号守
 名業あり降美ノ子也
 久人志事ハ出家位モ氏モ健氣
 毛子ハ五子あり事モ也ヤサカ
 思ふハ古あり是ハ三世人縁ハ
 今ハ今ハ今ハ今ハ今ハ今ハ今ハ
 今ハ今ハ今ハ今ハ今ハ今ハ今ハ
 今ハ今ハ今ハ今ハ今ハ今ハ今ハ

長刀打つて九条入江前より

[Faint, illegible handwritten text in the right margin]

下係之音曲先年白番雖令
板門也罷註教番因有脱落之

近厥亦入今亦後白番令用板者也
章句声付不順疎意所可有

從之學士有效受歟南都伯改正之

貞享三曆

丙寅

京都

西森六郎清政春
吉田徳共清満正

霜月名目

江戸

次原清徳春

